

Title	「藝術新聞」目録 : 自第五九九号至第六三二号(不揃)
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2021, 19, p. 68-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 自第五九九号至第六三二号(不揃

も発行されている。この「「文藝時報」の号数を継承し、一『「文藝時報」解題・総目次・索引』(不二出版、一九八七) 報」の後継紙に当たる。「文藝時報」は、一九二五年一一月メディアである。文学関係の情報に特化していた「文藝時 大学論集」一九八九・一二)。 発行したのが、「藝術新聞」である」(山内祥史「「藝術新 九三一年一月一日発行の第一五一号から、 た新聞である。現在では不二出版から全号が復刻されており、 二〇日から一九三〇年一二月二七日まで全一五〇号発行され などに関わる情報を週に一度、新聞の形式 目録——自第一五一号至第三七二号(不揃)」「神戸女学院 新聞」 文学・出版・絵画・音楽・ 紙名のみを改めて て発行 していた

> へて 過去十九年を省る号 (一九四三・一・一六) 期にかけて活躍した多くの文学者が寄 本紙も大正十四年削引人と、以下のように主要執筆者が紹介されている。過去十九年を省る「その時々の執筆者達」」と、「一人」の「面に掲載された「一 の一面に掲載された文学者が寄稿してい 々の執筆者達」という記 していた。 「六百号を迎

を重ねた。幾山河を越えつゝ紆余曲折の時代をすぎて当本紙も大正十四年創刊以来今号を迎へてまさに六百号 かえり茲に列記して感謝の意を捧げたい。号を送るに当つて文壇、画壇劇壇の主なる 配面では 彼岸の燈台として報道陣の完璧を期してきた。今六百 順不同 『壇劇壇の主なる執筆者をふりの完璧を其ー

藤 浩二、小川未明、 菊池 龍太郎、 寛、 島 前田河廣 水森亀之助、 細田源吉 横 徳田秋聲、豊島與志 光利 郎、武者小路実 戸川貞雄 米 片山伸、時津和 Щ Œ. 方、 片岡鐵品 新居 細 尚 田 中 田 河與 三 山近

加野

及び

藝術新

聞

には

大

正

末 期 か 6

昭 和 初

等の他 千 ĴΠ 彦 白 井 喬 本 Ш 荻 舟 白

群逸江 氏等 后 子、 が 、では 條 百 1合子、 柳 原 燦 子、 堀 江 カン

百田宗治、 白鳥省吾 藤 方 春夫、 京有日本 一点柳虹、 Ш 蒲原有明、 では大藤治郎 千家元麿 巽聖歌、 一、日夏耿之介、 高村光太郎、宮 内藤辰夫、日夏耿之命 與田 赤松 福 田正夫、 準 月 高橋邦太郎 宮崎丈二、 船 、大関五 綿貫六助、 伊福 室生 部隆 郎、 堀口 所 前田鐵之 廣瀬操吉、 輝、 大學、 野口 木 惇

上司小 田 演劇 木村! 剣 Ш // 大 規 、 大 夫 、 國枝史郎、 本有三、 林房雄、 尾崎士郎、谷崎精二、 稲 田 吉田絃二郎、 垣 森田草平、, 置三、 足村 山知: 穂 正宗白鳥 高 大泉黒石 松岡 村 須芳次郎、 義、 武 畑 伊藤 生方敏. 長與善 一、山田清1 大木雄 貴麿、 林初之輔、 秋 田雨 長谷川 雀 -山芦江 里 長田幹彦、 訪三 如是閑、 羅 見 織田 夫 藤森成吉、 郎、 芳 江 可 Ш 相 然吉、下 麿、前 昇曙夢、 額田六 濱田廣 馬 融 御 乱成風

掴

む

ことは

困難である。

一岐哀果、

金子洋文

田

関

П

田 田夕暮 壇 Ш 田 直 七 川小 口香 泉苳三、

井 名 邦子、 が 板 つていない 垣 いが、 川上小 伊藤 夜子氏等であ 大宅壮 る 尾 崎

田嗣 久米正雄、 治 鏑木清方、 <sup>毘胆寺雄といった面に</sup> 真杉静枝、三木露図 武田 上林暁、 麟 太郎、 三木露風、三好達治、萩原朔 金田一 京助、 , 保田與重耶、 , 保田與重耶、 , 保田與重耶、

山下淡水

断片的 範 多様に映し出 ような書き手に恵まれた媒体は、昭和前期の藝術とはなく、談話やアンケート程度のこともある。 囲 新聞というメディアの性質上、 で、 に 龍 この 保有 「しているにちがいない。ただしているにちがいない。ただに恵まれた媒体は、昭和前 している機関も限られている。そのため全「藝術新聞」の全号を所蔵している機関は 日々も執知 長い文章が書か 筆している ただ現在、 藝術界の 確認 しかし右 れ め全貌をいない。 動 できた V 前を 、るこ  $\mathcal{O}$ 

7 もっとも 7 目」(「ブックエンド通信」第七号、 五. いる 前 掲山 一号分(内欠号一)については、 (わずかな欠号は 藝術新聞」第一 内 「「藝術新聞」目録」によってほ から五九八号(一九四二・一二・二六) かしその前 五. (ある)。 後の 号から三七二号までに 号の また、 内容は明ら 一九八二・二) 五. 四四四 ぼ明らかに 号 <u></u> 九 0 で V

であっ ことよって、研究史の空白の一部を埋めたい(紙幅の関係上、四三・八・二八)までの三四号分(内欠号四)の目録を作る 会を得た。そのため本稿では、五九九号から六三二号(一九 六三三~六七○号については次稿に譲る)。 市立芸術大学日本伝統音楽研究センター図書室で まり三七三 「四・五・二○)までの大半を、このたび京 号から五四三号までと、五 五九九号(一九四三・一・二)から六五四三号までと、五九九号以降が不明 部を埋めたい '閲覧する機 都

聞」も時代の制約を強く受けている。それでも日本文学報国りは自由な立場で編集されている」とする。むろん「藝術新 心にして」(前掲「ブックエンド通信」第七号)では、「藝術日本文学報国会の成立と第一回大東亜文学者大会の開催を中 場で執筆、 新聞」の方が「週刊で発行回数が多く」、「すべて報国会の立 青山の細目に対する山内の解説「再刊「藝術新聞」を読む 一・五~一九四三・七・一)がある。両紙の差異について、 すくなるはずである。 国」(一九四三・八・二〇~一九四五 同時期の似たメディアに「日本学藝新聞」(一九三五 機関紙であった「日本学藝新聞」及び後継紙の 戦局が悪化してゆく時期の 編集されているといってよい「日本学芸新聞」よ 藝術界を複 ・四・一〇) と比 腿的 に捉え 「文学報

した。

藝術新聞」五九九号(一九四三・一・二) 面 には、 定

> の(談、インあたっては、 にい判も、断 ただし、 毎週土曜日発行も、二五〇号(一九三五・二・二)以降継続一・三)以来変わっていない。また、特に断られていないが、 西巣鴨 来の「文藝時報社」である。 れている。発行編輯兼印刷人は、一七二号(一九三一・一 西巣鴨二丁目二八四七 (談、インタビューを含む)、ならびに人物評に限 できるだけ触れるように ただ本稿では、 たものは、 二丁目二八四七 诵 署名がなくても私の主観で欠かすことが出 以来の多恵暉雄である。発行所は「文藝時報」以 版 ケ月 五百八十四号迄ある巻頭の時評、署名のあるも ブ五 採録することにした」という方針に沿って 割 |増| 各面 文藝時報 多恵暉 の最初に記載された無署名の 住所は一九三号(一九三二・一 雄」「発行 社」といっ 印刷 青山の「細目の記述に 所 た情報が記載さ 東京市豊島 東京市豊島 来ないと 定した。 記述も 区 区

# 「藝術新聞」 紐目 (五九九~六三二号)

## 第五九九号 昭和一八年一月二日発行 (同九日合併号) 二〇 記録さるべき昨 文協会員の整備 年の出版界 出版会結成まで其儘 著者側にも異変続出

思想戦 設立趣意書  $\mathcal{O}$ 中 核体成る 報局次長 言論報国会逞しく発足 奥村喜和男

面

らに由るの思想を掃滅 社団法人 大日本言論報国 政治経済武力戦 完勝

大日本言論報国会専務理 鹿子木員信

高村光太郎

技巧に走らざるものを 情緒の錬成 少年エヘ の文学対策 中加 藤 (談 談

われらの道

文学報国会の新構想

特集 近泳抄 大きなロゴスを掴め

深尾須磨子

庄亮

三 Ξ

キ 創作の歓

ヤビデ攻撃一

周年を迎へて

バ 

新年の構想 生産部門振励へ 文藝政策の樹立 事務局長 総務部長 事業部長

伏鱒二氏 南より帰る

新年の賦 邦楽雑感

昭和 十八年の新年に残す

> 笹 ĴЦ 臨風

前 田

鐵 之助

飯

山

 $\mathcal{O}$ 秋

忠烈千古を貫くもの

-年を回

顧して

洋画から日本画

の道

Ш 貞雄

新春

<u>i</u>随想

春

随

想

高き精神錬磨の 隣組長と画

心要

甲 戸

正雄 四四四四四四

「ミタカ少国民文庫」力を注ぐ山本有三

氏

美術家の戦ひ

カュ

九八七

福

田

栄

画壇人も総力戦

中

央に調査期間を設置せよ

(談)

+

公平 を期 す 日 本 画資材協会に就き 小室

対

根底に道義 居合術で塾員一同を錬成 伊東

望

談

+

絵

の

刻を国家目的に 資材より思想が重大 北村 深水

造型による日華握手 西望

興亜造型文化連盟の成立

光彦

川合

玉堂

·島舞踊見学

晃勢

守明

翠光 (談

П

華揚

大 乗

談

+

(談

+

	大政翼賛会文化部 本年度事業計画 大政翼賛会文化部 本年度事業計画 四十八団体千七百余名が 愛国の作品一般にも公開世紀の献納画 日本画作家総結集 彩管報国の赤誠吐第六〇一号 昭和一八年一月二三日発行 八面	事業方針凝議	たつちゃつれぎ音を 大百号を迎へて 過去十九年を省る 大政翼賛会 米英撃滅大二年に備へ 文化事業 大政翼賛会 米英撃滅大二年に備へ 文化事業
八	須田所長念頭の決意披瀝撮影所も戦場なり、優秀所員を表彰す	<ul><li>徳彦</li><li>二十</li></ul>	如是我聞 小山 年年明勇士と音楽 館岡謙
龍三	洋会	<u>-</u> +	盤会社の整備統合 当分現状を
) 七	劇評 明治座 (藝術座)・有楽座 (ロッパ一座	十九	各社の正月映画興行 封切番組夫々決定す
七	十二日大東亜会館に開催	信夫 十八	三浦 烏
哦会	社団法人 大日本興行協会 結成準備全国協議	企画部長	シンガポール総攻撃南方派遣隊へ
亦 雷吉 六	昭和十八年の舞踊界に望む		昭南より帰りて
清水六	民謡作曲私見藤井	十八	日満華の提携作品三本決定
六	ジヤズ等に最後の断		共栄圏建設を目指し 映画文化の交流旺ん
	敵性音盤千余種を徹底的に整理せん	十七	情報局参加作品は二本
量 豊 五	播州赤穂にて―眉仙画伯の襖絵を観る― 豊		都下七大劇場の正月出し物決定
四	京都洋画家連盟成る 市展中心に百余名参加	健次 十六	藝能家の矜恃 檜 は
· 島 茂 三	文学報国会 近畿総会記 五	十六	陽春三月晴の入賞決定
駆潜艇 三	文藝時評 世界観の問題		国民文化振興 三大藝能コンクール
田荻邨 二	聖戦二年を迎えて 京洛行事と「真心」 宇	豊十五	昨年諸展観の願望
2 完二 二	末歳随想 邦枝	十四四	美術各界四十氏の協力
7武羅夫 二	良き情威を―産業戦士の上に― 中村		志賀高原に築く 美術家錬成道場

	八面	第六〇三号 昭和一八年二月六日発行 ::			で描く	年戦死の意気で	戦艦献納運動熾烈化 一	
					八面	月三〇日発行	第六〇二号 昭和一八年一	
博	砂見 國	昭南ロケ記(シンガポール総攻撃)						
		大映京都対寒運動に協力	八			計らん	資材確保と適正配給を	
		健康の徹底を期し ラヂオ体操を実施			発足	材統制会社新	愈よ二月上旬を期し 資	
		社長に松竹大谷氏が就任	七	座	(歌舞伎	:明惠和合取組	劇評に 義経千本桜 神	
	を創設	和演劇会社	七			準備機関に	演劇資材統制会社の設立	
		米英敵性音盤○禁止作品一覧表○					演劇資材調査会結成	
	訓辞	愛国百人一首錬成会で 井上情報官制	六	龍三	蔦元		新洋会公演評(二)	
よ	大作を完成せ	一生一度の全力を傾注して 世に問ふ-	六			完了	報道部監修の下に吹込完了	
豊	豊田				が音盤化	コロムビアが	大東亜戦「勝利の記録」	
	I	播州赤穂にて―眉仙画伯の襖絵を観る-	五.				齋藤 長三	
彦	大森 光	興亜造形文化連盟		精二	菊地	松島 一郎	田中佐一郎	
		中北支工藝視察(二)			就いて	第十三回展に対	座談会 独立美術協会	
		先づ戦艦献納運動に着手	五.	光彦	大森	形文化連盟	中北支工藝視察 興亜造	
	国会成る	全国書家一千名の結集 大日本書道報日	四			か	主宰者なしの協力体制	
		書籍用外函廃止			9	在野統合進捗す	三団体が発展的解消	
		単行本の奥附に印刷する承認部数	三			訪ふ記	板橋養育院に 花外翁を	
		出版界の統制 監督系統の統一を図れ	三	龍川足	九頭		復古と太古史	
格	新居	多忙への考察(二)―疲労なき緊張―	三			独占に就いて	愛国百人一首 出版権の	
		年刊句集四月末上梓決定	_	新居格				
	凝議	文報俳句部会総会 蕉翁二百五十年忌				疲労なき緊張―	多忙への考察(一)―疲	

藝術院会員が大献納

早苗会解散す

故師山元家の希望に急転

輝く四十五年の

八八

七

五.

六 六

五.

兀

三三三二二

藝能団体と総動員 舞台の上から貯蓄奨励 豊田 豊	七		内務省再編成に乗出すの整備である。
1	六	を 開 催	リードニス銭サイー 母行 引の少国民、音盤文協が共催で国民音盤の向上を期し 関係者が錬
洋哨戒の話に作家態度	五.	竹	
九頭竜川足	五.	大森 光彦	興亜造形文化連盟
画壇時評 惟神道と日本画―日本水墨会に与ふ―			中北支工藝視察(三)
戦時下の装幀 庄司 淺水 (談)	五.		下馬評にのぼる六画伯
新発足は三月上旬の見込		く欠員補充か	話題の人々 藝術院会員 日本画部 近く
発足遅る 出版企業の整備 日本出版会誕生未し	四	児玉 希望	副島種臣の書をの皇室中心主義
路傍の石も叫ばしめよ 高村光太郎 (談)	四		洛西嵯峨画家隣組初常会
定型律か自由律か(1)			手弁当新年宴会で 陸海軍病院へ献画計画
時の人 文協常務理事 田中四郎氏	三		古本専門店まで出現す
今はなき白秋の肉声に感傷			大阪駅構内に 書籍販売店新設
藝術界あげて偲ぶ 故白秋百日祭	Ξ	の諸対策	如何にあり 目下考へられてゐる 業者
決戦体制の確立へ 美術家の日常生活の一切奉還	*/	成否は運用の	る 新刊書籍の買切制
美術報国会の結成方途 ガ島の犠牲を想ひ	$\stackrel{-}{-}$	を誓ふ	全国文学者の総意 歌人俳人も激励協力
第六〇四号 昭和一八年二月一三日発行 八面			国文学部総会 新使命に挺身を約す
	_	凰白 (談)	時代の動きに三宅
大映東京第一撮影所所長 鶴田孫兵衛	-	鶴友(談)	思出多し
『風雲の春』に就いて	_	一洋(談)	発展的解散へ案本
近く人事の更迭も断行			(早苗会) 回顧四十五年
大映社内機構改革 長期戦に対処せん	-		歴史閉づ 基金三万円の用途今後の懸案

八

八

ΞΞ

五.

五.

兀

実施方法に就て 日配・企画課長 青木 堯(談)返品は絶対に許されなくなる 四月廿一日から実施の買切制を検討す 人眼をひく軍服姿の喪主	―詩に音楽をとり戻せ―	か自由律か(2)詩を論ずべき時にあらず局第五部第三課長 井上司朗氏	時の人 藝術は政治なり 一	果然熾烈化す献艦運動、藝術各界一斉に蹶起す、全部門第六〇五号、昭和一八年二月二〇日発行、八面	記念日に映画配給社の計画	撃ちてし止まむの巡回映写隊を派遣われら美しき輪とならん	松竹は劇場を籠寅は劇団を 興行分業へ「三月発足の昭和演劇」今後の運営全く整ふ	ま協力者は厳重取締る 整界 - 敵性レコード献納運動を展開	舞踊の社会性(上) 蔦元 龍三二百卅億に最後の仕上げ
三三 二		. —	_		八	七	七	六	六六
漢詩・漢文学部会 準備委員会設立役員銓衡中第六〇七号 昭和一八年三月六日発行 八面第六〇六号 欠号	前途洋々校勢揚る藝能専門学校巡り「旧名に戻つて新発足」	松竹大船五大作品企画 極力映画報路映画報国へ 国家総力戦に呼応し	上原、小暮の両スタアを国劇に訪ふ客がおとなしくなりました	費が出す拾萬円投げ出す拾萬円	喬星萱公文化邓浸下各一京邓子奏记录:18炎生赤誠 建艦運動関西へ波及	―田中咄哉州の巻― 画室訪問 白隠の額がしよんぼり 新築成つた新以気	中北支工藝視察(四)          大森 光彦	「『記念』    「『記念』    「記念」    「記念』    「記念』	新太陽社 木村 正治(平凡社支配人 齋藤道太郎(
		$\lambda$		Ę	3	知庵	/ /	. 吹	談談

出版事業の統制運営を図り 国家的使命を発揚	尾崎 士郎 二	共栄圏点描(二)比島のあれこれなど	句帳より 富安 風生 二	愛国百人一詩 (一) 二	文報内に作戦本部設立か	素破!空襲時の「文学者の非常体勢」	世紀の会へ白衣の勇士招待	銀翼献納に起ち上る 文藝世紀会員一千名	日本出版配給株式会社専務 大橋達雄氏	時の人(9)日配精神の確立	輝く日本の藝術伝承=大日本工藝会が中心=	銀・銅を特配する親心	六〇九号 昭和一八年三月二〇日発行 八面		戦時下のスタア訪問記(三) 宇佐美淳氏 八	映画体育主催で天長の佳節に	映画人の錬成を目指し 五社競技大会開催	結局はハネを繰り上げるか 七	節電問題を巡つて 興行首脳者腐心す	舞踊の社会性(下)	文部大臣受賞音盤 七曲正式に決定す 六	京都・東京に内示展開催 五
第六一一号 欠号	第六一〇号 欠号		何かやりたい 吉川満子さん 八	決戦下のスタア訪問記(四)	果然業界の話題を呼ぶ	大映初代社長に 菊池寛氏が内定	今後の調整運営期待さる	製作、興行が併行して、映画決戦体制確立へ	意気消沈の競演を何んと看るか 七	国民演劇参加作品は 呆れた不成績振り	多彩な七十七年の生涯	洋画壇の巨匠を藤島武二画伯逝	―郷倉千靱の巻―	新居訪問 色彩派の構想 閑雅なる竹庭	企画、情報両部の活躍に期待	行動体の組織に■■替へ 青衿会新陣容決る	中北支の工藝視察(七) 大森 光彦	西山 翠嶂(談) 四	彩管労務の熱意から 工場員を絵で犒ふ	画期的の使命達成 情報局次長 奥村喜和男 三	文協・解散式に於ける訓示 荊棘の道を拓て	情報局総裁 谷 正之 三

菊池寛・小川虎之助	六	佐々木すぐる氏―	
山田耕筰・内田岐三雄・杵屋佐吉・久留島武彦・		[百人一首の作曲家を訪ねて(二)	愛国
藝術報国大会から	六	画塾   献納画展参観(上)	長流
村田周魚・森本治吉・内藤櫂	五.	.陳百五十授賞十三の盛況	出
久米正雄・神保光太郎・英美子・吉植庄亮・		の桜と咲き競ふ 日本画院展堂々開催	上野
細田源吉・石原文雄・村雨退二郎・坂本三百・	四	献納画に就て 上村 松園	戦艦:
文学報国大会に拾ふ	四	報参与 志賀健次郎氏	産
戦ふ文学者藝術家熱火の弁		巡回展の方法   指導と調査を行ふ	工場
美術も決戦調へ 日本美術報国会結成	四	報の取扱方針漸く決定す	産
第六一三号 昭和一八年四月一七日発行 四面		塾の工場巡回展 関東中京で二十七工場	西田
	三	文藝春秋編輯局長 齋藤龍太郎	
邦楽座支配人 久保光三氏 (談)		(土産話(下)雑誌の進出は 今後十年後か	南方.
一問一答 タアキイの運命 女装にあり	三	出版会の各理事就任決定 理事長には久富氏就任	日本
今後の対策要望さる	_	回 航空文学賞 真室二郎氏	第二
紅白交互続映興行 各館共に成績不振	_	日本詩壇の詩人賞に「黄風抄」決定	大阪
神洲 櫻花	_	[百人一詩(四)	愛国
戦時興行の実体(下)公演時間を短縮せよ	_	の春 岩野喜久代	吉野
建艦興行をやりたい 有楽座 加藤源次郎	_	の群読と朗誦 翼賛文化部の新企画	短歌
将来は一元化されるか 日本劇場 松村 俊雄	_	画伯年譜(下)	藤島
お客には親切丁寧 新橋演舞場 丸山喜代次郎	_	戒警報下 文学報国大会開く	警戒
東京劇場 仲野 金雄		ごから実戦へ 筆の戦士決戦の誓	書斎、
歌舞伎の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい		二号 昭和一八年四月一〇日 八面	第六一

特輯

戦時興行の行方(下)

躍進する中国文学界 米英撃滅に突進す

八

七

七七七七

短歌群読の問題(二)短歌群読私案 前田 夕暮慰問に講演に指導に 文報が詩歌で昂揚愛国百人一詩(六)	文壇人は挙つて 爆弾や魚雷に署名せよ  米英撃滅精神の鼓舞  久富陣営の花形	時の人 日本出版会を 切廻す三人男 内閣大改造を断行 朝野一体の大政治力結集東条内閣・新陣容の驀進	一四号 昭和一八年 大畑	行調整の各館成績 現状では経営不可能人大衆諸雑誌の発売日変更さる先が出版業者の整理から	日本出版会に要望す(上)当面の二つの問題短歌群読問題(1)連作か長歌を選べ 窪田 空穂愛国百人一詩(五) 建作か長歌を選べ 窪田 空穂建艦献金の 文学者揮毫展 好評上乗の売れゆき上海、南京、北京にて機関誌発行
== =	<u> </u>	_	四 四	三三	=====
いづれも古本屋の流行の貸本屋に新にたの貸本屋に新いるが出版会が	短歌群読の問題 (E 大和當麻寺 愛国百人一詩 (八)	百人一詩を選んで(一) 六月中旬選定結果発表深くして美しい 戦時下	報初代会長 比島民衆今 昭	<ul><li>一 低</li><li>五 番</li><li>号 線</li></ul>	興行調整の第三週 海原にありて歌 海原にありて歌   大東亜戦争:   大東亜戦争: 日本出版会に要望
の兼業新制度を実施すっ元的機構要望さる	四)群読方法を究めよ	(一) 黒発表戦時下の国民座右銘	画伯を推薦の秋 条首相電撃視察 条首相電撃視察 おおり 四日 かんり かんりょう かんしゅう かんしゃ かんしゃ かんしゅう かんしゅん かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅん かんしゃ かんしゃ かんしゅん かんしゅん かんしゃ かんしゅん かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんし	を挙げん	望楼、家共に振はずへる=大木惇夫著= へる=大木惇夫著= を設けよ を設けよ
乗制 一一元 業 度 建 的	凹)群読方法を究め	の国民座右	画伯を推薦 の秋 条首相電撃視察 発育	λ : :	望楼、家共に振はへる=大木惇夫著= へる=大木惇夫著= き設けよ が、中)出版物の計

日本美術報国会定款(下)	全部門一丸新発足 誓ひも固し美報の創立総会	戦ふ藝術必勝への総進軍 皇国美術の確立へ	第六一八号 昭和一八年五月二二日発行 四面		山本司令長官の初登場	記念日を期して公開 映画「海軍戦記」完成	辞典不足で 学生困難 共同使用を依頼す	関西出版業者懇談会開催	出版会の重大使命を 関西業者に力説す	紫雲英咲く頃 水原秋桜子	愛国百人一詩(九)	百人一詩を選んで (二) 土屋 竹雨	短歌群読の問題(五)決戦精神の昂揚 照井 瓔三	社団法人日本美術報国会定款(案)	堂々!四百名の画伯参集	逞しき文化戦の一翼 美術報国会創立総会	第六一七号 昭和一八年五月一五日発行 四面		山根壽子さんは語る	問題の巨篇「男」 全ロケを終り	敵機空襲 満洲への輸出禁止	映画製作態度に 国際性の考慮要望 音楽大進軍
-	_				四		三	三		_	=	_	_	_	_				四		四	
百人一詩を選んで(三)	「艦たてまつれ」共立講堂に開く	山本提督の悲報を伝へ 撃滅に燃え起つ	大日本映画専務 河合龍齋氏	時の人 映画報国に邁進せん	国際文化が文報に提案	枢軸・中立各国へ "日本文学"の贈物	第六一九号 昭和一八年五月二九日発行		当局より関係者に方針説明	大陸映画と提携作品 今後は脚本事前検!	日本美術及工藝統制協会 設立趣意書	情報局文藝課長	美統の設立経過 美報と表裏一体	日本美術及工藝統制協会 会長	三千年来の技術を守り 皇国美術の確立	大政翼賛会副総裁	国家興隆の関頭に起ち 美術家へ期待大・	短歌群読の問題(六)幽玄荘重であれ	愛国百人一詩(十)	みことかしこみ	「海軍展」に呼応して百貨店にて	女流作家が総出勤で 海の勇士へ慰問文
土屋		「詩の夕」					四面			閲		井上		吉野	を望む	後藤	なり	逗 子		相馬		
竹雨		_										司朗		信次		文夫		八郎		御風		
$\equiv$	$\equiv$		_		_				四		三	$\equiv$		三		三		$\equiv$	$\equiv$	$\equiv$	<u> </u>	

撃滅へ・献金へ 賑つた辻小説・詩展	黒南風 久米 三汀	愛国百人一詩(十二)	百人一詩を選んで(四) 土屋 竹雨	本月中旬日比谷公会堂にて挙行	軍人援護献納作品 盛大を予想される献納式	日本文学報国会人事機構一覧表(五月末現在)	「勝利の陸軍魂」を万代に伝ふ	新戦場へ美術家動員 栄えの廿六氏近く進発	挙国一丸聖戦完勝を誓ふ	一億敬弔英魂を送る 山本元帥の国葬	第六二〇号 昭和一八年六月五日発行 四面		帰還第一回 出演を控へて 細川 俊夫	東宝 虎彦龍彦準備進む 原作者 坪田譲治氏語る	平出大佐 推薦文 「海ゆかば」に	城戸松竹専務大船所長帰朝談	南方映画工作の現況を視察して	…明治美術研究所…	良書と企画(一) 異色ある出版物	大物出版の計画が 最近続々発表さる	五月の庭 川上小夜子	愛国百人一詩(十一)
=	=	=	=	=		_	_		_				四	四	四	四		三		三	=	<u> </u>
	東宝「若き日の歓び」は大削除	大映「戦陣に咲く」は突如上映を禁止さる	書評 美くしき朝=その他詩集・藝談=	伝統千年の「悲田院」独訳	盟邦独逸へ渡る 聖徳太子の御遺徳	「ひさぎ会」は発展的解消	女流歌人が奮起して 挺身報国団を組織	広く勤労人の参加を希望	実作指導を兼ね 短歌の夜間講習会	百人一詩を選んで(五) 土屋 竹雨	愛国百人一詩 (十三)	文報「短歌部会」が支部規定・準則発表	岡部文相弔詞	画壇書道界挙げて痛惜	わが油絵界の巨匠(中村不折画伯逝く)	第六二一号 昭和一八年六月一二日発行 四面		映画に思想戦弾丸の	官庁・文化事業団体の 映画製作積極的に協力す	良書と企画(二)推薦図書が多い=青磁社=	発行の許可は三名 多数申請者から厳選	生ける提督 山本元帥の伝記
	四		三	三		$\equiv$		_		_	$\equiv$	_	_	_				兀		三	三	

古本屋の貸本料 愈々最低は十銭ときまつた 古本屋の貸本料 愈々最低は十銭ときまつた 書評 堀口氏「檳榔樹」と大類氏の「日本の城」 再びこの失敗なきを期す 再びこの失敗なきを期す ボニ三号 昭和一八年六月二六日発行 四面 在野派も審査陣に合流 文展の決戦体制成る 地方へ出張監査の新制度	満洲の読書界 日本物が全盛 七月廿一日から愈々実施 一月前に予告して 図書を買切制へ 学話 邦枝氏 珍品入手 舎井 邦子	二号 昭和一八年六月一九日発行 四面 三号 昭和一八年六月一九日発行 四面 群読の問題(七)表現に感動を盛れ 五味 保 に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す
一 四 三三三	三三 二二	====
第六二四号 昭和一八年七月三日発行 四面 美術に結ぶ日華の契り 日本画展に絶讃の嵐 ◇…中国各地で日延べの盛況 ◇…中国各地で日延べの盛況 有実養所に 古典講座を開設 事攻学者等第一陣に進出す 事攻学者等第一陣に進出す	「海軍」の製作に就て松竹京都 田坂 □◇…盟邦独逸映画産業界より映画「世界に告ぐ」を東條首相に贈呈書評 「三十三年の夢」「双竹亭随筆」外一篇書はる推導の先登に図書館	を員会 ◇…委員九十四名任命 を工時間余の獅子吼 本二時間余の獅子吼 本二時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼 を工時間余の獅子吼
	具 隆	正爾
	四四 三三	= ===

二	各方面に奇異の感を与へた 中央公論の自発的休刊	出版はどうなる 三人の女性	一日だけの百姓では ◇…某作家は語る	感激の独訳 古事記に就て (一) 木下 祝夫	愛国百人一詩(十七)	期待される国民学術協会の講堂	思想戦の精鋭が 決戦下言論陣を布く	中村不折小伝(2) 石井 柏亭	大政翼賛会 宣伝本部陣容成る 民間から二百名委嘱	十名を選び今秋派遣	大東亜建設の花開く 日泰文化使節の交換	第六二五号 昭和一八年七月一〇日発行 四面		各社が国民におくる雄編	航空記念日を期し 空の決戦映画公開	スイスの女流詩人から 憧がれの日本へ詩集の贈物	書評 「左手で画く絵」「朝菜集」「空の御盾」	丹羽氏の従軍記「報道班員の手記」絶版	計画出版が愈々具現化	緊急諸部門に対し 洋紙追加割当をなす	雑詠 柴原希祥	愛国百人一詩(十六)	「華文」と「文学集刊」
々纏つた編輯新陣容成る 々纏つた編輯新陣容成る 々纏つた編輯新陣容成る を開ふ廿四年 最大漢和辞典完成へ と配画(三)全廿四巻の国学体系 と企画(三)全廿四巻の国学体系 と企画(三)全廿四巻の国学体系 とで所設立の前提として で方・昭和一八年七月一七日発行 四面 大号 昭和一八年七月一七日発行 四面 関本 2 と決定 を一度を表に正しい一徹な性質 川合 玉堂 がく文化戦に 逞しき文化奉公会 あルタに佐官待遇 武田麟太郎氏活躍 カルタに佐官待遇 武田麟太郎氏活躍 の独訳 古事記に就て(二) 本下 祝夫 下出版界の 統制指導愈々強化 本下 祝夫		_	_	=	=	_		_	_	_				四		三	三	三	Ξ		_	=	<u> </u>
	戦下出版界の 統制指	の独訳 古事記に就て (二) 木下	国百人一詩(十	ヤカルタに佐官待遇 武田麟太郎氏活	国の英霊に米英撃滅を	ち抜く文化戦に 逞しき文化	大佐新任 平出大佐は軍令部課	軍報道部課長	に正しい一徹な性質 川合	像画家として 画格を完成し	の生涯を思はす清く静	に見る国士の風貌 島田墨仙画伯逝	六号 昭和一八年七月一七日発行 四		峰三枝子も特別出	川哲夫第二回作「日本娘」	立の前提とし	戦映画界の急務 映画科学協議会設	国叢書の新企画 地	書と企画 (三) 全廿四巻の国学体	理大教授諸橋博士の偉	と闘ふ廿四年 最大漢和辞典完	々纏つた編輯新陣容成
		夫	_	_	_		_		堂						כוח		Ш		=		_		=

場精神昂揚の戦力演劇の創作に、文	注目すべき最近の傾向映画俳優の交流と「舞台俳優出演盛ん」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	う 長見平 青色 Air 妾 東羽 画 开記 Air 妾 と 下、八月三十日より美術協会で まっぱん ラップ・ラード まんり まんり まんり アイ・データ アイ・ディー・ディー アイ・ディー・ディー かいかい かいかい かいかい かいかい かいかい かいかい アイ・ディー きょう かいかい かいかい かいかい かいかい かいかい かいかい かいかい かい	廿五周平を卯/ 未葉会記念展を開催す一感激の独訳 古事記に就て(三) 木下 祝=国民脚本社の新発足=	防人として人一詩(十	久米氏の「紙の弾丸」に反響湧く中央協力会議に 「読者隣組」を提案	大政翼賛会文化部機構・人事一覧表古典物や短歌、俳句など講義	文報が全国各地の傷痍軍人を慰問第六二七号 昭和一八年七月二四日発行 四面	半期の製作に稍々待望	の現代劇製作 成績頗る平凡に終本歴史も二万部発行	共栄圏のヨイコに 絵本「周遊日本」を送る書籍雑誌両委員会陣容成る
四 [	四 三	<u>-</u> = =	夫 	_	_			四	=	=
	<u> </u>	<del></del>		. —	_			23	_	_
in American	映評(急降下爆撃隊)独ウフアの大作 ・ 九月航空記念日を中心に展開 ・ 時画・ 演劇タカ劇 名料神 普及追動	画、寅則尽ぶ亢宮青申舎女重助「詩集青天祭」二版印刷中	自審の売れ亍きこ 前田夕暮夭驚く書評 熱河、皇民の詩 「たいわたな」  決戦体制郥応の新方進	出版の企画は、どんな状況にあるか 石塚	飛んだ珍歌も飛び出して文報主催の短歌講習 爆笑裡に盛会好評	愛国百人一詩(終)「花と兵隊」の訳者等に	我が軍政監部が 日本文化の紹介者を表彰まつたを知らず 壁文藝第二輯を配布	村不折小伝(4)委員、幹事長等発令さる	美術品 回収銅物件審査委員・査員辞任・善後策注目さる	文展問題を繞つて 委員会数次召集第六二八号 昭和一八年七月三一日発行 四面
				友二				亭		

第二回大東亜文学者大会(代表者(百名)決定 一中村不折小伝(6)	戸川 貞雄(談) 一	第二回大会の使命 三項目の凝議に終始	第二回大会代表顔触れ 決戦に備へ編輯人を動員	大東亜文化の総力結集	第六三〇号 昭和一八年八月一四日発行 四面		提言 映画の娯楽性 制作者の反省を望む 四	大映と日活が 今度は合併か ◇…両専務は語る 四	人的機構や順序	推薦図書 どんな方法で選ばれるのか	書評 陸軍報道班員手記 我ら傷つくとも 三	特に科学振興を重視	日本出版界最初の図書推薦発表さる	満洲開拓地の視察 阿部 静枝 二	感激の独訳 古事記に就て(四) 木下 祝夫 二	思想戦大学講座も開く	言報、北海道支部 発会式盛大に挙行	中村不折小伝(5)	第三回大東亜文学者大会	し 共栄圏文	第六二九号 昭和一八年八月七日発行 四面
感激の独訳 古事記に就て(六)    木下 祝夫 二  鉄兜で隣組共同壕へ=阿部静枝氏の巻=    二	文壇防空壕めぐり(二)	尾崎 士郎(談)一	決戦文学精神の確立―文学者大会に望む―	社団法人日本文学報国会機構人事一覧表	第二回大会に課せられた使命	大東亜文学者が 真に決死報国の秋	第六三一号 昭和一八年八月		新任の海軍報	映画と演劇の強力指導へ	一 褒賞制フイルム特配 配給方法は当分変更なし 四	一映画の配給に潤ひ	戦力増強の新方向を目指して	一国民運動としての読書運動を展開せよ	一 笹川臨風氏を中心に 二	一 戦時下に吻と一息 不忍池畔の観蓮会	文報機関紙「文学報国」 来る廿日創刊 二	鉱山文学の樹立 作家側も必勝挺身 二	感激の独訳 古事記に就て(五) 木下 祝夫 二		文壇防空壕めぐり(一)

大磯別邸にて「東方の門」執筆中三代に輝く文豪 島崎藤村氏急逝 天羽情報局総裁演説要旨	大東亜文学の創造は「大東亜民族の結束文学者大会第一日に拾ふ	文学者大会燦然開幕	絶対不敗の誓も固く(全東亜今ぞ新生す)	第六三二号 昭和一八年八月二八日発行 四面		国民士気の昂揚に乗出す	日本移動映写連盟 設立協議会を開催	売切、買切制が示す受註状況	決戦読書界の様相 重版物に殺倒す	秋聲老病む 坂口内科に近く入院	いねがてに 大木 惇夫
<u> </u>	_	_				四		三		=	<u> </u>
(さいとう・まさお/本学准教授	<b>〈付記〉本研究はJSPS科研費17K02450の助成を受けたものである。</b>	(以下次号)		大日本映画協会の設立準備	映画に事業をいよいよ 強力指導統制す	想ひ出あれこれ 藤村移動美術館など 有島 生馬	岡部文相弔辞	島崎藤村年譜(一)自明治五年至明治二十五年	中村武羅夫	島崎藤村を想ふ 「書下し」と自費出版の先駆	藤村先生の御霊に捧ぐ 川路 柳虹
	ろ			兀			三				